

# 中国・北京市の教育事情について

前北京日本人学校 教諭

福岡県福岡市立席田中学校 教諭 柳 瀬 智

キーワード：現地理解，教員教育，現地校訪問，中国の小学校英語教育，インタビュー

## 1. はじめに

この報告書では、現在の中国・北京市の教育事情について、小学校英語教育を中心に授業参観、現地校訪問、さらに中国人教員へのインタビューなどをもとにその現状を報告する。さらに、中国の大学や児童養護施設などの教育機関への訪問などを行うことによる現地理解教育の新たな方向性を示したい。

## 2. 義務教育制度の現状と問題点

平成 25 年 3 月に、中国人民大学教育学院の嚴平教授から「中国における教育制度：現状と問題」の講義を受けることができた。嚴平教授によると、農村部と都市部における義務教育の現状は大きく違うという。近年、義務教育制度は法律上の整備は整えられたが、農村部では授業料が無料ではないなどの問題があったようである。それは、2005 年に温家宝首相が「農村部に授業料無料の徹底実施を厳命」したことからも明らかだという。

また、義務教育の規模が教育機会を容易に平等化できない要因の一つだとも指摘している。それは、農村部の児童生徒数が都市部の約 4 倍近くであるからだという。嚴平教授の資料によると、2010 年度現在、都市部の小学生が約 1800 万人に対して農村部は約 8100 万人、都市部の中学生が約 1100 万人に対して、農村部は 4200 万人である。さらに、日本の義務教育ではあまり聞かない「寄宿生」が一つの要因であるとも指摘している。これも同資料によると、2010 年現在、小学生の寄宿生の割合は、全国約 10% に対して西部農村部約 17%、中学生では、全国約 44% に対して西部農村部約 61% となっている。これらの寄宿生の数は年々増加しているとのことである。義務教育段階における寄宿生の存在は大きな驚きであるが、近年農村部における学校併合の促進により、このことがさらに拍車をかけていることは、今の日本においても規模は異なるが同様のことが言えるのではないかと思われた。

以上のような要因と、農村部における「留守児童」、都市部における「出稼子女」などが、現在の中国の義務教育の「危機」を招いているとも指摘された。

## 3. 現地校訪問

### (1) 授業及び参観クラスの概要

平成 24 年 3 月に校内研修の一環として、これまで北京日本人学校と児童交流活動をしてきた花家地実験小学を訪問し、2 時間の授業を参観した。

北京市内にある花家地実験小学は、シンガポール国際学校の先生を英語の専任教師（非常勤講師）として招聘している。そのかわりに、当該校からは中国語の先生を派遣している。

教科書は、無償とのことで全員が持参していた。また、電子黒板の教材は、外国人児童用の専用教材であった。参観クラスは、6 年 8 班（組）、児童数 36 人である。

### (2) 授業の内容

授業の最初に学習プリントを配付して始まった。教室前面に電子黒板があり、イギリスのケンブリッジ出版の教材を電子黒板で使用していた。

授業は、ほぼ英語で進められていた。一部中国語訳をさせる場面があったが、その他はすべて英語で質問して、

英語で児童は答えていた。

この日のトピックは、電話での応答と天候についての表現練習であった。教材はイギリスのものであるので、当然イギリス英語であり、イギリス人とカナダ人の会話であった。天候については世界地図に天候の絵が載せてあり、その絵をみてプリントの表にチェックしていく形で学習を進めていた。

基本的には個人学習形態であったが、後半では、教科書の本文の読みの練習の際に、3人1組となって3分間グループ読みをさせていた。その後、1グループを指名し発表させたが、非常に流暢に読むことができていた。

最後は、中国の文化紹介文を6つほど学習プリントに載せており、その紹介を教師が英語で行い、次時の予告としていた。



### (3) 感想及び考察

学習の雰囲気は、英語使用が当然という感じがした。中国人教師が指導するのではないかと考えていたが、専任教師を雇用することによって英語の技能を高めることを促進している。

電子黒板の電話での応答は、故意に雑音を混ぜており、非常に聞き取りにくかったにもかかわらず、子どもたちは教師の質問に次々と答えていた。教科書を使って予習をしていたと考えられる。

学習の様子や挙手も多かったことから、英語学習に意欲的な児童が多いと推察される。さらに、グループ学習を取り入れているところも、発話を大切にしていることを示していると感じた。今回1時間しか参観できなかったが、教員の英語を使用しての発問や指示に対して児童の戸惑いの様子が見られなかったことから、普段からこのように英語での発問や指示を繰り返していることが予想される。

電子黒板の教材であったので、流れに無駄がなく、音声や画像が効果的に利用できている面は見習うべきであるが、日本の小学校英語教材も電子黒板を利用した教材であるので、その点は追いついている。ただ、日本は教科の指導といった感が否めないが、こちらからは日本の外国語活動としての雰囲気は感じ取れなかった。今後、日本でも小学校で英語が教科として指導されるようになるならば、現在使用している電子黒板の教材などから、同様の雰囲気になっていくような予感がした。

## 4. 中国人英語教員（小学校）インタビュー

### (1) インタビューの概要

中国人英語教員の日常と英語教育への意識を調査することを目的として、北京市内の普通小学に勤務する20代の女性英語担当教師（7年の英語教員の経験）に半構造化面接と質問紙を用いて回答を得た。

### (2) 主な質問と回答から

#### ①勤務校及び授業時間について（質問紙の回答より）

普通小学に勤務しており、1学級の児童数は30人前後である。児童は、中国語や算数の授業と同じように

英語の授業を受けており、教科による学級構成児童の移動はない。授業は月曜日から金曜日までの週5日制である。毎日の授業時間は、1, 2年生は4時間半、3～6年生は5時間である。1時間の授業時間は、45分である。英語の授業時数は、1, 2年生は毎週2時間、3, 4年生は3時間、5, 6年生は4時間ある。

#### ②英語教員・教員教育について（面接回答より）

日本の教員免許にあたるものとして、教師資格証が必要である。また、北京市内の学校に勤務するためには、北京市民であることも必要である。英語教員の研修については、区や教育局が主催する研修会が毎週水曜日にある。時間は、2～4時間程度で、内容は、教育法や授業参観など様々である。この研修会には、全英語教員が参加しなければならない。

#### ③授業や評価について（面接回答より）

自分の週の授業時間は、17～18時間である。ネイティブスピーカーはいない。授業はパソコンやテープ、実際の物を使って行っている。英語の歌を授業で取り入れている。指導方法として英問英答や児童同士の会話練習を行っているが、中文の英訳、英文の中国語訳はしていない。教師の英語使用割合は、できるだけ使っているとの回答である。ただし、文法説明には中国語を使っている。

教科書を使っての指導もあり、指導書も存在している。指導書は、教材研究に十分活用している。

評価については、A, B, Cの3段階で評価している。テストで、読む、書く、聞くの3技能を評価している。また、ユニットごとにテストを実施している。保護者には1学期に2回以上評価を知らせている。

#### ④英語教育のねらいについて

小学校卒業時に、どれくらいの英語の力をつけて欲しいと考えているかと質問したところ、即座に700語を書ける、読める力だと回答し、これは中国のガイドラインで決まっていると付け加えた。小学生に関しては、アクセントをしっかりと習得し、リスニング力とスピーキング力をつけさせたいと語っていた。文化面に関して尋ねたところ、教科書に載っている内容で学習する機会があるとの回答を得た。最後に、中国での英語教育の重要性を尋ねたところ、英語は大学入試に必要であるからという回答であった。

### (3) インタビューを終えて

回答内容から考えられることは、大きく分けて2つある。1つは、英語教育に関して、中国の教師教育は充実しているということである。都市部に限るのか北京市だからなのかは不明であるが、毎週の研修会は実施する方も受講する方も大変であろう。しかし、この先生は研修は当然であるように答えていた。この点は、日本は見習うべきだと思う。次に指導方法であるが、1年生と6年生では当然違うのだろうが、英語を極力使って指導していることは共通しているようだ。これは、先生の英語能力が高くないとできないことであり、実際に話してみると、先生の英語は分かりやすく、こちらの英語も十分に理解できていた。失礼なことだが、実際のところ、これほど小学校の英語の先生が英語を使えるとは考えていなかった。

面接の最後に、英語教育を通して児童に学んでほしいことについて尋ねたのだが、人格形成や外国文化などの回答を期待していたが、どちらかというと英語そのものについてのねらいしか引き出せなかった。しかし、まずは英語そのものを十分に身につけさせたいと考えるのはもっともなことであろう。

## 5. 新たな現地理解教育の模索

### (1) 国際学校訪問・児童交流

現地校である花家地小学への訪問ができなくなった後、他の小学校への訪問も現実的にはさらに難しくなった。そのような中でも、本校の5年生は宿泊学習、6年生は修学旅行などで、現地校や現地の人との交流をすることができたのは幸いだろう。1, 2年生については、毎年1月にドイツやフランス国際学校とのドッジボール大会があり、現地校ではないが、国際交流する機会がある。

私は、最終年度に4年生を担当し、学年主任としてなんとか児童の交流ができないかと模索した結果、本校の

斜め前にある3eインターナショナルスクールとの交流を企画・実施した。しかし、年度当初に計画をしていなかったために、教育計画に入れられなかったので、授業時間を使っての交流は断念した。相手校の先生と協議をした結果、昼休み交流という形に落ち着いた。地理的にも近いということもあり、お互いの学校を訪問し、子どもたちは英語や中国語を使って遊び交流をした。これまでどの学年も交流したことがなかったのが不思議なくらい相手校は非常に友好的かつ協力的であった。今後の発展を期待する。

## (2) 高等教育機関訪問

2年目の春休みは中国人民大学を訪問した。また、3年目には日本語を話すことができる大学関係者と知り合うことができた。北京大学の日本人留学生、対外経済貿易大学の中国人の先生、北京師範大学の中国人の先生である。この方々の協力により、当該校を訪問して現状を聞くことができた。どの大学も英語教育の重要性は高く、英語はできて当たり前、そしてさらに何を習得するかが大切なようである。

対外経済貿易大学では、日本語学科の授業にゲストとして参加することができた。入学3ヶ月程度で、日常会話ができるようになってきている学生には大変驚かされた。しかし、例年2クラスの設置であったのが、今年度は1クラスの募集しかなかったとのことである。

## (3) 児童養護施設訪問

北京日本人会の役員から、日本人会が北京市内にある「光愛学校」という児童養護施設を支援していく方針であると聞き、平成25年の秋に他の教員とともに同行させてもらった。

その施設は、中国国内の孤児を対象とした養護施設であり、小学校の教育施設を併設している。中学校以上の教育は、企業等からの寄付により校外の私立教育施設で受けるようなシステムになっている。教室は狭いが、少人数のために問題はないようであった。運動場はスポーツ用品メーカーの支援により立派なバスケットボールコートがあり、その横には卓球台が備え付けてあった。

しかし、教育だけでなく生活も支援する必要があるため、児童生徒全員が寮で生活を共にして、ほとんどの先生も寮で生活をしている。食事は自分たちで作るなどけっして恵まれているとは言えないが、話をした子どもたちは非常に明るく我々を迎えてくれた。校長の話によると、対人コミュニケーションが共通の課題であり、休日には、支援企業主催のパーティーやカウンセリングなどに子どもたちは全員参加しているとのことである。

今後は、中国の現地理解教育の一つとして、このような教育施設との交流も選択肢になるのではないかとと思われる。

## 6. おわりに

近年、中国と日本との政治的関係や大気汚染などにより現地の教育環境は厳しい。しかし、北京日本人学校でも子どもたちのために現地の教育資源（博物館、公園や農園など）を有効に利用しながら中国ならではの教育も進めている。現地では、日本を敬遠している人ばかりかというところではなく、日本の教育に興味をもっている中国人研究者もいる。3年間の研修中、その人たちとの交流を通して中国の教育事情について若干の調査を行うことができた。中国における現地理解教育の研究は困難を極めている。しかし、このような方々と交流をしながら研究をすすめることができるのではないかとというのが、私の提案である。授業をしながら研究を進めることの困難さもあるが、人との交流は楽しく、意義深い。私だけでなく、家族にも3年間という貴重な体験をする機会を与えていただいた。現地の同僚や福岡市教育委員会をはじめとした多くの方々に感謝をしたい。